



昭和基地内の多目的アンテナ（衛星受信とVLBI用）とGPSアンテナ（手前）



レスキュー訓練。ロープでクレバス内を降下する状態を想定している。

した越冬を通して、このことを考え直す場面に何度も遭遇した。ピラタスの乗った40m×25mの水盤が救出作業中に割れる可能性は否定できなかった。旧ソ連のヘリコプターからピラタスを吊り下げるためのベルトの耐久性にも、確信はなかったはずである。さらに天候は刻一刻と悪化しており、下手をすれば救援にかけつけてくれたヘリコプターごと落下、作業に当たっている人すべてを巻き込むような大惨事となる可能性すら、ゼロとは言えなかった。

「本当にやり遂げる自信があったのですか？」10年くらいたってから川口隊長に尋ねたことがある。

「越冬初期の事故を引きずり、萎縮したまま1年を暮らすと、人命にかかわる事故につながりかねない。とくに本来の仕事を失う3人（パイロット2名、整備士1名）のことを第一に考えた」「いくつかの幸運な条件が重なり、助かりそうな時の運も感じられた」と、隊長は答えた。

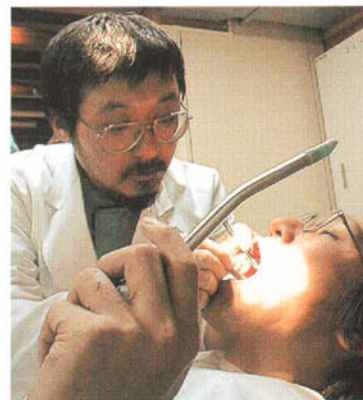
ただでさえ精神的に不安定になりやすい越冬開始直後というタイミングにあって、本来の仕事を失い、誰かの仕事を手伝うだけで達成感を維持し、ほどよい緊張を保っていくことはどのような人物であってもむずかしい。気の緩み、あるいはストレス、実際に生死にかかわるような事故は、こうしたことがらの積み重ねによっておきるものなのだ。

南極では風邪をひかない?! 本吉洋一

越冬隊への子供たちからの激励メッセージの中に、「寒いところで風邪をひかないよう、がんばって下さい」というものが必ずある。寒い＝風邪をひきやすい、というのは日本ではほぼ常識化しているためだ。

ところが、南極ではほとんど風邪をひかないのである。その理由として、まずはあまりに寒いので空気中のウイルスや細菌の数が少ないこと、そして、越冬隊40名の閉鎖社会でほぼ全員が同じウイルスを共有しているの、それらに対して免疫ができて、新しいウイルスが入ってこない限り風邪は発症しない、ということが挙げられる。

反面、人間の免疫系に対しては刺激の少ない環境であるため、南極で1年間越冬すると、いわゆる体の抵抗力が落ちていることも事実である。それゆえ、迎への「しらせ」が昭和基地に到着すると、次隊が運んでくる“新種”のウイルスにとっても簡単にやられ、さらに日本に帰国してからもひどい目に遭うことが多い。



歯科治療。外科、内科について疾病統計の第3位になるくらい虫歯が多い。